

龍

(能)

シテ 島村 明宏
田 ワキ 殿田 謙吉
ワキツレ 平木 豊男

間 清水 宗治

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 麦谷清一郎
小鼓 住駒 充彦 笛 室石 和夫

後見 広島 克栄
福岡 聡子

地謡 谷 清士 藪 克徳
酒井 章 佐野 由於
中村 清 佐野 玄宜
山崎 健 松本 博

休憩 二十分

昆布売

(狂言)

昆布売 鍋島 憲

何某 能村 祐丞
後見 山田 讓二

(仕舞)

松風

松田 若子

地謡 田屋 邦夫
渡邊 荀之助
佐野 玄宜
木谷 哲也

(能)

項

羽

ツレ 笠間 啓
シテ 高橋 右任
ワキ 北島 公之
ワキツレ 平木 豊男

大鼓 田中 一義 太鼓 麦谷 曉夫
小鼓 住駒 幸英 笛 江野 泉

間 炭 哲男

後見 藪 俊彦
木谷 哲也

地謡 浅谷 之信 佐野 弘宜
寺田 茂 渡邊 茂人
大澤 永靖 高橋 憲正
館 聖 川島 英治

能龍田 (たつた)

秋も暮れ過ぎた霜降月のある日、奈良から河内の国へ向かう経聖の一行(ワキ・ワキツレ)が龍田川を渡ろうとすると、「川に散り浮く紅葉の錦を渡ることと裁ち切れば神と人との仲も絶えましよう。それは薄氷が張る冬の川でも同じことです」と言って行く手をさえぎる女(前シテ)がいます。女は巫女を名乗り聖を龍田明神に案内します。冬枯れの社頭の本立の中に色鮮やかな盛りの紅葉が一本あって、これを神木と聞いた聖は紅葉を幣として神前に手向けます。宮巡りをするうちに巫女は龍田姫を名乗り、光を放ち紅の袖を被いて社壇に入ります(中入)。やがて通夜する聖の前に太陽が輝くような奇跡が実現します。神官の打つ鼓の音と共に御殿が鳴動し、光まばゆい御神体(後シテ)が現れました。国を守り民を豊かにする龍田の神は、代々の歌人に紅葉を詠まれてきたことを思い、夜神楽に時を忘れて紅葉を幣、時雨を鈴、波を白木綿とする祝詞をあげた後、昇天します。

狂言 昆布売 (こぶうり)

北野のお手水の夜、使用人が出払い、自身太刀を持って、社参に出た侍が、若狭の小浜の昆布売りと同道、無理強いに太刀を持たせ、持ち様をあれこれ指南したうえに、昆布売りを太郎冠者呼ばわりします。腹を立てた昆布売りは、太刀に手を掛け、小刀を奪い、侍に昆布を売らせます。その売り声を、謡節・浄瑠璃節・踊り節にうたい分けるのが聞きどころ。あげくは自分の末繁盛を祝福させ、なおも侍に太刀を返さず、なぶり逃げします。

能項羽 (こうう)

鳥江の野辺で仕事を終えた草刈り男たち(ワキ・ワキツレ)が便船を待つところへ老船頭(前シテ)が操る小舟が通りかかり対岸へ渡してくれました。船頭は船賃に草刈りの持つ美人草を一本所望します。その名のいわれは投身自殺した項羽の后虞氏の塚から生い出たことにあると教えた船頭は項羽の最期を語ります。四面楚歌を聞いて虞氏は居たたまれず、望雲驢という千里を行く名馬は膝を折って動きません。運命尽きるのを悟った項羽は、後世に語り伝えよと自分で首を掻き斬って呂馬童に与え、野辺の露と消えました。そう語った老船頭は実は項羽の幽霊でした(中入)。草刈り男たちは大般若経を読み上げて弔います。そこへ虞氏(ツレ)を先立てて項羽の幽霊(後シテ)が現れます。天女が楽を奏するような虞氏の姿には四面楚歌の最期が思われて執心が募ります。虞氏は高樓からの投身を項羽は最期の奮戦をなぞり返して恐ろしい勢いを見せつけた後、土中の塵に帰ります。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成二十九年十月一日(日)午後一時始

(能) 半 部 (狂言) 謀生種 (能) 阿 漕